

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4391500016		
法人名	有限会社さかがわ		
事業所名	グループホーム優海		
所在地	熊本県天草市「御所浦町御所浦3916－6		
自己評価作成日	令和8年1月10日	評価結果市町村受理日	令和8年3月23日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和8年2月9日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

事業所開設20年目を迎える。多くの利用者との関りを得ながら、地域にとって「なくてはならない」「あって良かった」と感じてもらえる事業所作りを目指し、利用者本人・そして家族に寄り添いながら、その時必要な支援を提供できる体制作りに努めている。また、医療面では離島であるという立地的ハンデを考慮し、協力医療機関である診療所と常に連携を図りながら、早め早めの対応を実践している。
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

居ながらにして御所の浦の海や山々を望みながら、馴染みの職員に囲まれ穏やかな日常生活を送る入居者の姿を変わらず見ることができた。離島という環境にあり医療支援や交通手段をはじめ陸地のようにはいかない面が多々あると思われるが、医療支援においては島内唯一の診療所医師による「普段から入院をしなくてよい支援」が入居者の健康を支えている。また、管理者を中心にチームワークをもって入居者や島外在住も多い家族との関係性を大切に、島内唯一のグループホームとして本人・家族の思いに応えられるよう努力している。これまでホーム内調理を継続してきたが今年度入居者との関りを増やすため、昼・夕食の主菜などは調理済みのものを活用しているが、以前のように入居者の出番が持てるよう時々にはホーム内調理の日も設けたいとしている。天草ならではの食材を活用したり、入居者の昔取った杵柄が発揮できそうな変わらぬ職員のアイディアに期待したい。今回も方言「あろばな〜!(またね)」と温かい見送りの言葉を受けることができた。
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅰ.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	今年度の事業所目標は基本に立ち返ることの必要性を再認識する意味で、職員間で話し合って決定をした。法人の基本理念とともに、毎朝の申し送り時に復唱している。	法人の基本理念とともに職員が今のホームに必要な年目標を提案し、本年度は「落ちついた行動」と「ていねいなケア」を年目標としている。年度初回の運営推進会議でも紹介し、職員はケアの基本に立ち返ることで、法人の基本理念である「ゆとりあるゆかいな生活のために～」の実現に向けたワンステップとして取り組み、年度末の評価で目標達成に至らなかった場合には再度継続することもあるとしている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	年2回実施している消防避難誘導訓練には近隣住民にも参加協力をいただいている。また地域の伝統行事への参加や文化展への出展、放課後デイサービスの子供達との交流などより多くの関りを継続できるよう支援をしている。	運営推進会議に参加する社協主催の中学生のワークキャンプや社協子供デイを利用する児童の来所は入居者にとって何よりの交流の機会となっている。児童と恐竜絵画展への出展作品を合同制作し、作品作り当日は満面の笑みで参加されている。ホームは地域の一員として区費を納入し、近隣の方による花壇の手入れを受けたり、差し入れ野菜の調理法を伝授してもらいながら、散歩の際には入居者と一緒に挨拶や立ち話で交流している。	開設時より離島というハンデの中にあっても入居者と職員がそれぞれの力を発揮しながら生活しており、地域にも十分理解されている。管理者が自宅で介護をする住民などを対象とした講習会で講師役として認知症の啓発と介護例等を紹介するなど地域貢献を果たしている。今後もホームに出来ることで地域交流に尽力されることが期待される。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	社会福祉協議会主催の家族介護支援事業で「認知症について」話をさせていただいた。また、入居希望のご家族が見学に来られた際は、事業所としての取り組みをお伝えしている。			

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1度会議を開催している。委員の方からは放課後デイサービスの子供達との交流の機会を提案していただいたり、身体身体拘束対策会議では貴重な意見もいただいている。	運営推進会議は包括支援センターや社会福祉協議会、自治会長や老人会の地域代表者がメンバーとして参加している。会場をリビングとしており、参加者は入居者の普段の様子や生活環境を間近かにすることで、会議内容とリンクさせながら意見や提案を出されている。それぞれのメンバーがホームのことを熟知されており、数年ぶりに再会したワークキャンプなどへの協力や、9月に着任した技能実習生への食器提供など受け入れを後押ししている。会議の中で身体拘束や虐待等の研修内容についても報告している。	リビング内で入居者も普段通りに生活され、会議にも参加されている。家族の参加は難しいようであるが今後も協力を呼び掛けたり、事前に会議で検討してもらいたい内容について意見を聞き取ることも良いと思われる。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市から送られるメールには逐一目を通し、情報の収集に努めている。また、必要に応じて市の担当者に電話で連絡、相談を行い不明な点を解消に努めている。	運営推進会議に参加する包括や社協職員とは、互いの情報を共有して様々な協力が得られている。職員は行政主催の研修にズームなどで参加し、メールでの事故報告や認定調査は居室や事務所で対応し、入居者の生活の様子を見てもらうこととしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定期的に“身体拘束自己点検シート”の記入を全職員が実施し、身体拘束をしないケアの実現に向けて再認識の機会を持つようにしている。	身体拘束適正化委員会や勉強会の内容は運営推進会議でも報告している。会議の参加者にはリビング内で入居者と職員のやり取り等を直接見てもらうことで透明性を図り、率直な意見をもらうようにしており「言葉使いには気遣いがあるが、声のトーンについては気になる」といった意見が出され、話し合いの機会となっている。職員の身体拘束自己点検シートにより、自身の振り返りと集計結果を勉強会で検討し、入居者支援に反映させている。	ホームは立地上安全面から見守りカメラや居室などにセンサーを利用しているが、継続して利用することや現状等を説明することが必要であると思われる。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年度頭に虐待防止対策のためのマニュアル確認と、同意書への記入を実施している。機会があればリモート研修に参加し、関連する動画を視聴するなどして虐待防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	利用者の中には成年後見制度を利用されている方もおられるため、管理者が定期的研修に参加をし、全職員と情報を共有している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前や契約締結時に文書や口頭での説明を行い、疑問点や不安なことはないかの確認を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の要望は日々の関りの中で、言葉や表情から把握をしている。また、ご家族からの電話や面会の際は、ご家族としての要望はないか確認を行っている。	入居者の要望は普段のやり取りや生活の中から拾い、自らストレートに言われる方もおられるが、なかなか口にされない方もおられるようである。言葉が少ない方にもホームでの様子から推察したり、選択肢を投げかけて返事を待つ等対応している。家族の意見や要望は面会時や電話等で聞き取り、何かあれば職員と共有し、出来ることで対応している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定期のミーティングの開催が出来ていない中、代表は時間を見つけてホームを訪れ、職員の意見等を収集している。	職員の退職はなく入居者との馴染みの関係性ができているが、本年度は育休や技能実習生の雇用等により体制に変化があり、有給や希望休なども互いに譲り合い、正月の出勤等を決めている。管理者はミーティングの時間がなかなか取れなかったとして、朝の申し送りを活用しカンファレンスの時間をとっている。職員は意見や要望を管理者に伝え、管理者から代表者に報告するようにしている。代表者もホームを訪れた際には、職員から直接話を聞くようにしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	各職員の勤務状況や実績、また意見など管理者より代表へ伝えている。必要時には代表自ららが個別に各職員に対応している。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表より諸研修参加の提案を受けることも多いが、立地条件や人員の関係もあり会場に出向いての研修参加の機会は少ない。但し、webでの参加やYouTube視聴での研修は出来ている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域の社会福祉協議会や他法人のケアマネとの情報交換や交流は出来ているが、十分なネットワークの確立には至っていないため今後はネットワーク作りに力を入れていきたい。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	来訪時の相談の段階で、本人や家族の希望、不安や困りごとを丁寧に傾聴するように努めている。解決困難な事案に関して、打開策と一緒に検討していく姿勢を示している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人への対応と同様に、家族の要望や不安にもしっかりと耳を傾け、可能な範囲で要望に添えるよう努めていくことを、家族に伝えながら良好な関係を構築できるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族の置かれている状況を踏まえながら、先ず必要とされる支援を見極めたうえで、その方向性を本人や家族に示し理解を求めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者一人ひとりの残存能力・意欲に目を向けながら、「出来ること」「や“やりたいこと”が無理なく継続してできるよう、家事作業の手伝いをはじめ日常生活の中で工夫をしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の要望を把握し、必要な時は家族に相談し協力を得ることで、家族“任せっきりで申し訳ない”という気持ちを抱くことがないよう努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの理髪店に出かけていただいたり、利用者の知人に声を掛け面会に来ていただく等、これまでの関係性が継続できるよう支援をしている。	入居者にとっては散歩中の島の風景やテーブル上での手仕事、診療所の医師による診察など全てが馴染みであり、生き生きとした表情は“ゆかい便り”で家族と共有している。入居者は家族の面会を楽しみにされており、家族から届く馴染みの食材に喜ばれる等入居後も変わらぬ関係性が築かれている。作業等に入られる前には腕まくりをして、「さ〜行くぞ」とばかり参加される姿も馴染みの風景である。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	昔から馴染み同士の利用者、また入所後に良好な関係性を構築できた利用者同士が、日々の生活の中で関りを深め、支え合えるようレクレーションの内容や座席配置等に工夫をしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去決定後も本人や家族からの相談を受けることも少なくない。精神面でのフォローも含め、ホームとして可能な限り支援を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	意思の疎通が可能な利用者からは、その時の本人の要望や思いをしっかり聞き取り、要望に添えるようにしている。また、本人の日々の生活スタイルや性格を把握し、意思の疎通が困難であっても本人の思いを汲み取り、臨機応変に対応することでストレスなく生活が送れるよう努めている。	入居者と職員の距離が近く、テーブル席で調理に使う野菜の下ごしらえなどをしながら、会話の弾む賑やかな日々であり、普段のかかわりの中で思いを収集するようにしている。意思疎通が取りにくい方にはホームでの生活ぶりや職員の気づき、家族からの情報により本人本位となるようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に家族や担当のケアマネージャーから、必要な情報を提供していただいている。入居後に実際の暮らし方を観察しながら、細かい情報を把握し職員間で共有している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	その日、その時必要な支援を見極めて把握するために、利用者一人ひとりの言葉や表情、健康状態等の観察、確認を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の生活の中での職員の気づきや、本人・家族の意見、要望を反映させながら介護計画を作成している。	職員は入居者との生活の中で思いを収集しているが、言葉での表現が難しい方であっても問いかけに頷かれたり、好きなものを口にされた後に言葉が出たりとその方に応じた引き出し方で確認している。入居から3年あまり、少しずつ意思の疎通が難しくなられた方には、入居者の「出来ることは自分でしたい」との思いに、家事仕事やレクリエーションへの参加を継続して、自信や他者との交流を後押しするような内容としている。担当者会議には管理者や主任、ケアスタッフや看護師が参加し、親族が入居者と一緒に外出された時のレベル低下への気づきから、介護度ではなく、深いかわりが必要であると判断し、プランに反映させている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	家族からの意見や要望等記録に残し、職員間で共有している。また、職員の意見や気づきも重要な情報と認識し介護計画の見直しの参考にしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	「今日一緒に外出をしたい」「親族の葬儀に参列させたい」等の家族の要望にも柔軟に対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	町内の行事の見物・見学に出かけていたっている。月一度の移動図書館の訪問は現在も継続しており、読書を楽しまれる利用者にとっては楽しみの一つとなっている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者のほぼ全員が、入居前からホームの協力医療機関である診療所をかかりつけ医とされているため、スムーズに情報共有が出来ており、何ら問題なく本人や家族の理解を得ることができている。	島内にある診療所をほぼ全員が入居前からかかりつけ医であり、現在月1回の訪問診療や必要に応じた往診が行われている。診療所医師は普段から入院をしなくていい対応を図ってくれていることや、経験のある看護師の入職は心強いものとなっている。歯科は必要時に診察や治療を受けている。ホームは離島ということもあり、専門医をはじめすぐに医療支援を受けることが難しいことから日頃の健康管理には職員間で十分共有を図っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎日実施するバイタルチェックの結果はタブレットに入力し職員で共有できるようにしている。日常の関わりの中で気づいた小さな変化も業務日誌や口頭で申し送りをし、看護師が受診の有無を判断する材料となっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	遠方の家族に代わって、書類の記入等支援している。入院時には介護サマリーを作成し、医療機関への情報の提供を行っている。また、退院時には退院時カンファレンスに同席している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合や終末期、その段階に応じて主治医に相談を行い、連携を図っている。ホームでの看取りを希望された場合は、医療機関の協力体制も含めてホームで出来ることをの説明を行い、可能な限り本人やご家族の意向に沿ったケアの提供が出来るよう努めている	入居時に重度化した場合についてホームの取組の説明とその時点での家族の意向を聞いている。殆どの方がホームでの最終を望まれている。今年度は12月にお一人の方の看取りを支援している。家族が遠方であったため、小まめに報告を行ったり、ビデオ通話も取り入れ状態を伝えている。支援後は家族から感謝の言葉を受けており、振り返りも行われている。看取りの勉強会として、カンファレンスの中で、職員のメンタル面も含め行われている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	普通救命講習を事業所単位で定期的に受講しており、殆どの職員が応急手当や初期対応の訓練をしている。心肺蘇生の実践経験がある職員も数名いる。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防避難誘導訓練は半年毎に年2回実施しており、近隣住民の方にも参加協力をいただいている。また、風水害時の対応に於いて動画の視聴や研修資料を通して、全職員へ緊急時の対応について周知を行っている。	半年ごとに消防避難訓練を実施しており今年3月と10月に済ませている。10月の訓練では近隣者も参加されており、消防署も2回に1回の割合で参加協力が得られており、アドバイスや指導を受けている。風水害の対応について動画(YouTube)を活用したり資料を通して職員間の周知が図られている。また水害への備えとして水のうを試験的に作っている。	ホームは高台や山林のある立地のため、今後は山林火災について運営推進会議の中で提案することも必要と思われる。取組に期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	申し送りや職員間で利用者の話題を挙げる際には、個人の特定ができないような呼び方に配慮している。また、利用者によっては、一言一句に慎重な配慮を要する方もおられるので、細心の注意をはらっている。	入居者の呼称は基本的に下の名前にさん付けとしている。職員は入居者と身近な関係でありながらも馴れ合いにならない様、言葉使いなどを含め管理者は気になることがあれば、申し送り時等に伝えている。また、実習生が訪れた際、丁寧な朝の挨拶など学ぶことが多く、職員にとって自身を振り返る機会になったとしている。居室へ入る際は「入りますね～！」と声をかけての入室を共有している。身だしなみやおしゃれも本人の好みに沿って、衣服の選択を一緒に行ったり、自身でコーディネートされる方もおられる。また、お化粧や日々の洗顔を腕まくりをしてされる方など、個々の大切にされてきたことが継続されている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で、利用者本人の思いや希望を発する機会が持てるよう、雰囲気作りや会話の内容に工夫をしている。意思疎通が困難な場合は、表情や仕草からその思いを汲み取り、本人の希望に少しでも添えるよう努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日その時の本人の体調や気分等を見極めながら、食事時間の変更、外出の支援、レクレーションへの参加等相談しながら決定している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節ごとに担当職員が本人と相談しながら衣替えを行ったり、必要な衣類の購入をご家族に依頼するときは、サイズや服の好み等職員が助言をしている。自身で服の選択が困難な利用者には、職員と一緒に選んだり、アドバイスをしながらその人らしい身だしなみができるよう支援をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	現在は外部からの配食サービスを利用しており、調理の下ごしらえ等を依頼する機会は殆どない。配膳や下膳、茶碗洗いの作業は継続してお願いをしている。	現在朝食はホームで作っているが、昼・夕食はご飯と汁物以外は外注のものを活用しており、その分入居者への支援にあたることでできていると語っている。近隣者からの大根の差し入れを受けた際、葉っぱの活用などもアドバイスがあり食卓に上がっている。移動販売で購入する季節の果物や手作りケーキなど入居者が楽しめる食事支援に努めている。入居者も配膳や下膳、茶わん洗いなどは継続して取り組まれている。	今後は時々ホーム内調理で手作り料理を楽しんでもらい、そのことが入居者の出番にもつながるとしている。取組に期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎日の食事量、水分量は記録に残しその情報を把握したうえで、食事量の少ない方には代替品を提供し、水分が不足気味な方には好みの飲み物を準備し水分補給を促している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自身で洗面所での口腔ケアが可能な方には、毎食後声掛けを行い自身のペースで歯磨きをして頂いている。困難な方には、職員がスポンジやガーゼを使って、口腔内の確認をしながら支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者各々の排泄パターンを把握し、トイレ誘導を行っている。夜間紙パンツを使用される方も、日中は布パンツへの交換を行っている。	把握した個々の排泄パターンを活用し、トイレへの声掛けや誘導に努めている。日中は布パンツへの交換をおこなっており、半数ほどの方が布パンツ(パット併用者もあり)で過ごされている。夜間のみ使用される方のポータブルトイレは、トイレ同様清潔に管理している。便秘の予防として十分な水分補給などの他、個別で室内ウォーキングや散歩の支援が行われている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	十分な水分補給と繊維食品の提供に努めている。また、便秘気味な方は、毎日のレクリエーションや体操の参加に加えて、個別にウォーキングを実施している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	健康状態の確認を行ったうえで、入浴の声掛けを行っている。異性介助を拒まれる利用者には職員を交代するなどしながら、気持ちよく入浴出来るよう工夫をしている。	毎日入りたいの希望から週3日の入浴を午後のおやつの中から健康状態を確認したのち支援している。好みの湯温に調整し、同性介助にも可能な限り対応している。職員が持参した柚子湯を使った季節湯は、2～3日間実施し、全員が入れるようにしている。	洗剤の置き場所については、安全面から別の場所での管理に期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	早めの就寝や日中は自室での休息を希望される方、朝は早めの起床が習慣の方等、それぞれのタイミングやリズムに沿った生活が継続できるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	全職員がそれぞれの薬の内容を把握できるよう各薬箱に薬の明細を貼付しており、利用者から「なんのお薬？」との質問にも答えられるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者各々の言葉や生活歴から、得意な家事作業や制作活動を把握している。自身の職歴から「掃除は大好きです。毎日させてください。」と言われる利用者もおられ、張り合いに繋がるよう日々の日課にしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ドライブに出かける頻度は多くない。但し、本人やご家族の要望や依頼に添って、職員を補充しながら外出の機会を設けている。	入居者の外出への希望や外気浴への対応として、シルバーカーでも行ける範囲の散歩に出ており、近隣者とも挨拶や言葉を交わす機会となっている。また裏庭の桜を見ながらの花見、ウッドデッキでは「青空カフェ」としてお茶の時間も楽しんでいる。家族の協力で、年末年始の帰省時には日程調整をはかり送迎支援が行われている。管理者は現在ドライブの機会は少ないが、今後気候も良くなれば状況を見ながら取り組みたいとしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族より「お預かり金」という形で現金を預かり、ホームで管理をしている。嗜好品や必要な日用品の購入時にはその旨を本人に伝え、一緒に買い物に出掛けるなど支援をしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を所有しておられる利用者は、定期的に自ら電話をかけて家族とお話をされている。そうでない方は、要望があればホームから電話をかけられるよう支援している。最近はタブレット端末を使用して、ビデオ通話で話をされる機会も多くなった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	各利用者の関係性や身体状況に配慮しながら、リビングの座席を配置している。花壇の花々を眺めるのを楽しみにされている方、テレビ視聴を楽しみにされている方、各々が居心地よく過ごしていただけるよう工夫をしている。	職員は特に入居者が日中の殆どを過ごすリビングが居心地の良いものとなるよう、室温やテレビの音量、花壇の整備などにも十分配慮している。また席の配置も身体状況や相性などを考慮して決定している。リビングや廊下に掲示する季節に応じた作品は大作で入居者が中心に作られており、生活の意欲につながり、家族や来訪者にとっても楽しみになっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	改築した面会室で塗り絵制作に集中される方や、リビングのソファでゆっくりするのが好まれる方等、各々のスタイルに合わせて過ごしていただいている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際、自宅での馴染みの物や使い慣れたものを持参していただくよう伝えている。	使いやすい広さの居室からは青い海や夏には町のイベント、打ち上げ花火も見ることができている。入居の際居室への持ち込みを含め必要な品についてはリストを渡し説明を行い、質問などがあれば連絡してほしと伝えている。また居室内を実際見てもらったり、準備品は新しく購入される必要はないことを申し添えているが、寝具類は新たに購入される方もおられる。孫・曾孫さんの写真を掲示し、毎朝「〇〇ちゃん行ってくるね」と言ってリビングに出て来られ、部屋に戻ったら「ただいま！」と挨拶をされる方もおられるようである。時計や化粧セットを使い慣れた収納ボックスに入れ毎日使用される方もおられる。テレビの持ち込みも数人おられるが、殆どの方はリビングで他の方と一緒に見られている。	部屋を早めに温める必要がある方への対応等、個々に応じた居室環境への取組も聞かれた。コロナ禍やインフルエンザなどこの数年は家族がゆっくり居室へ入る機会は少なかったようである。今後は状況を見ながら家族が改めて居室内を見てもらう機会を持たれることも安心につながると思われる。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	全フロアバリアフリーであるため、車椅子でも制限なく移動可能である。各居室入り口やトイレのネームプレートなどを確認しながら、安全に確実に目的の場所へ移動することができる。		